

山口大学野良猫0プロジェクト

ー山大にゃんこ大作戦フェーズ2ー

	代表者	前原光主穂（共獣B 4年）	
構成員	大和美海（人文B 3年）	石田千穂（共獣B 4年）	西本美晴（共獣B 4年）
	福永茅広（共獣B 4年）	本多紗弥華（共獣B 1年）	
	梅岡翔太（農学B 1年）	川村文乃（共獣B 1年）	
	清原鈴音（共獣B 1年）	隠居加奈子（農学B 4年）	
	和泉川日菜（農学B 1年）	皿海凌也（工学B 1年）	
	多木裕哉（工学B 1年）	吉永陽水（人文B 1年）	
	宮崎咲桜（教育B 1年）	森野羽菜（経済B 1年）	
	河内裕香里（教育B 1年）	佐々木月海（教育B 1年）	
	三代晴香（教育B 1年）	宮崎優衣（人文B 1年）	
	頼岡未歩（教育B 1年）	西崎舞亜（経済B 1年）	
	林志磨（経済B 1年）	織田航平（工学B 1年）	
	松並花音（農学B 1年）	齊藤ひとみ（理学B 1年）	
	池田琢馬（共獣B 1年）	今中絢登（共獣B 1年）	
	藤田直也（共獣B 1年）	古本和葉（人文B 1年）	

1 プロジェクトの目的

現在キャンパス内に生息する34匹（プロジェクト開始当時）の野良猫を対象とした、学生主体の適切な管理体制を確立する。これにより、吉田キャンパス内で見られる野良猫によるトラブルを解消するとともに、今いる野良猫を最後の世代とし、野良猫ゼロを目指す。

動物福祉、環境衛生、公衆衛生の観点からも野良猫を減らす取り組みは重要である。猫は繁殖能力が非常に高い。野良猫の増加により衛生環境が損なわれ、ご近所トラブルやクレームへとつながり、近年は野良猫をめぐるトラブルが社会問題化している。また、人への感染症の危険性も高まり、時には命に関わる事態も考えられる。一方、野良猫ゼロを目指すということは、これ以上過酷な環境で生きざるを得ない猫を増やさないということである。一般的に野良猫は病気や事故の危険性も高く、その平均寿命は3～5年とされ、飼い猫のそれよりはるかに短い。増え続け手に負えなくなった野良猫に対し、殺処分という選択肢を取らざるを得ない場合もある。

実際に山口大学吉田キャンパスにおいても、一時は猫が60匹以上となるなど、その繁殖に歯止めがかからなくなっていた。猫の糞尿や鳴き声、ゴミや畑を荒らす、などの理由により、教職員や学生、また学外の近隣住民からのクレームやトラブルが報告されている。繁殖に関しては、これまでのTNR活動により、学内で繁殖が起きない状況を達成した。現状の問題点を以下の2点、すなわち不特定多数による無秩序なエサやりが行われていること、排泄物の掃除等が不十分であることと捉え、これらを解決しつつ、最終的に学内の野良猫をゼロにするための新たな管理体制の構築を目指す。

2 活動内容と成果

1) 毎日の掃除・給餌管理の継続

7月中旬、陸上競技場横の猫が集まっているエリア（以下、ふようロードとする）において、掃除・給餌管理の活動を開始した。このエリアを選択した理由には、TNR対象とする猫がおり出没时间やエサやりを調節したい、猫の出没时间や分布エリアがまばらで動向が把握しづらい、道路に近く事故や外部猫との接触の危険性が高い、といったことが挙げられる。活動を行うにあたっては、まず、このエリアの管轄である学生支援課の担当者、活動の趣旨や内容について説明し理解を得たうえで活動を開始した。時間、場所を固定し、掃除も毎日行うといったルールに則り、衛生的な管理を行うという基本的事項のほか、おもプロ申請時に課題として触れていたゴミの捨て方や場所の問題や、活動周知のためのポスター、また動物遺棄抑制のためのポスターについても一緒に話

し合い、合意形成に努めた。

給餌の活動方法について、構成員内のコアメンバーを中心に流れを何度か確認し、HowTo リストを作成したうえで、すべての構成員が同じように活動が遂行できるようにした。また、活動記録フォームを作成し、活動時は毎回記録をするようにした。給餌や掃除の活動のほか、近隣の猫スポットや、時間がある際は学内の猫の見回りを行い、学内状況の把握に努めた。また、活動の様子、猫の様子などを毎日グループ内で共有することで、構成員内のモチベーションの維持や情報の共有に努めた。

入学試験等で入構禁止となる日、出歩けないような天気の日を除き、毎日活動を継続した。実際に活動を行っていく中で、エサの節約問題や、夏の間の虫の問題、カラスの問題、撒き餌制御不足問題（後述）など、様々な問題が見えてきたものの、メンバー内や学生支援課の担当者の方と話し合い、修正を重ねながら活動を継続することができた。活動を続けていくうちに、時間になると猫たちが給餌場所近くで待っているようになり、いまだ不安定さはあるものの、猫の生息場所や時間の管理という点においては効果を実感できた。また、掃除についても、排泄物の位置がだんだんと一定になってきたような印象を受け、とれる糞の量も次第に多くなっていった。管理を行う目的の一つである環境美化においても、着実な効果を得られていると考える。



掲示したポスター



ポスター掲示の様子



活動の様子（給餌時間にきた猫と掃除の様子）



給餌時間に来る猫が増えてきた様子



給餌時間前に待機している猫



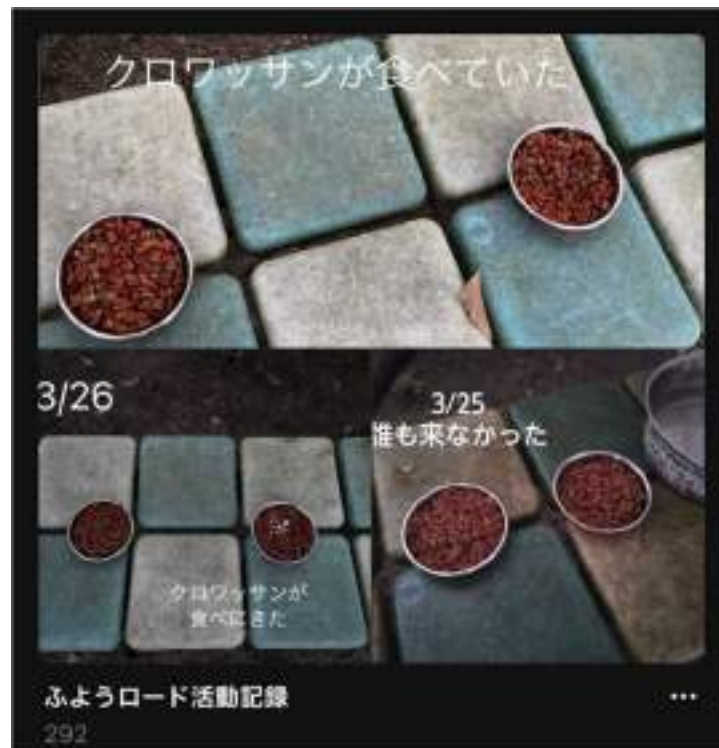
掃除の様子



掃除の様子



掃除の様子



活動記録の様子

【ふようロード】おもプロ'23活動記録

Googleにログインすると作業内容を保存できます。詳細

活動メンバー（西字のみでOK）

名前を入力

何時にスタートしましたか？

☐ 18時頃
☐ その他

エサはどこに設置しましたか？（複数回答可）

☐ 出入り口近くの柵の上
☒ ベンチの上

活動記録フォーム

エサは食べていましたか？

☐ いいえ

☐ 1匹が食べていた

☐ 2匹が食べていた

☐ 3匹が食べていた

☐ 4匹が食べていた

☐ その他: _____

どの餌が食べていましたか？（複数回答可）

☐ つばき

☐ カカオ

☐ クロワッサン

☐ チョコレート

☐ 分からない（全頭/一部）

☐ その他: _____

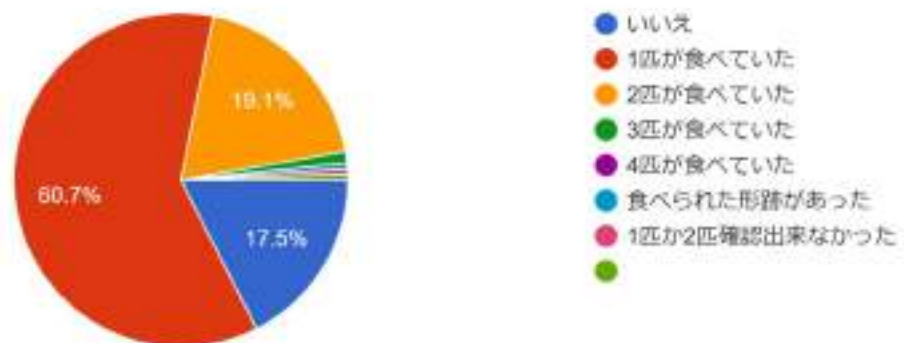
食べ残しは回収しましたか？

☐ はい

活動記録フォーム（続き）

エサは食べていましたか？

183 件の回答



給餌の結果（活動記録フォームの結果より）



その他のエリアの猫やエサやりの調査



その他のエリアの猫の調査



その他のエリアの猫やエサやりの調査



猫に関する情報共有



MTGの様子



ある活動日での1枚

2) 猫除け超音波装置の設置

1) のふようロードでの管理活動開始と合わせて、学外との距離が近いこともあり、支援学校向かいの出入口付近に、外部猫侵入防止のための超音波装置の設置を行った。また、外部猫侵入に対する対応として、国際交流会館横の学内外出入口付近にも、同じく超音波装置を設置した。超音波装置は猫除けとして高い効果を発揮されているが、大学キャンパスという、外部からの侵入が容易な開かれた場所においては、外部猫の侵入を100%阻止することは不可能であり、事後対応の十分な検討が必要である（後述）。



ふようロードにおける超音波装置の設置



国際交流会館付近における超音波装置の設置

3) TNR 全頭完了

外部から侵入した猫2匹をあわせ、今年度は3件TNRを行った。そして、現状我々が把握している学内猫の全頭に対しTNRが完了した。これで、学外から雌雄の猫が侵入してこない限り、学内での繁殖は完全に制御で来たと言える。また、今年度は3頭の学内猫の死亡を確認し、失踪疑い等も考慮すると、2024年3月末時点での学内猫は30匹と把握しており、前年度に続き減少傾向となっている。外部猫の侵入に対する対策、学内にいる猫の適切な管理の拡大と継続、を行っていけば、このまま減少傾向が続いていくと思われる。さらに、今回のおもしろプロジェクトとは直接関係はないが、2021年度に外部のボランティア団体のご協力を得て譲渡を試みていた猫たちについて、今年度すべての譲渡先が決定した。長い間ご協力いただいたボランティア団体の皆様に心より御礼申し上げる。以上を踏まえ、学内猫の推移はグラフのようにになっている。



捕獲器設置の様子



網での捕獲



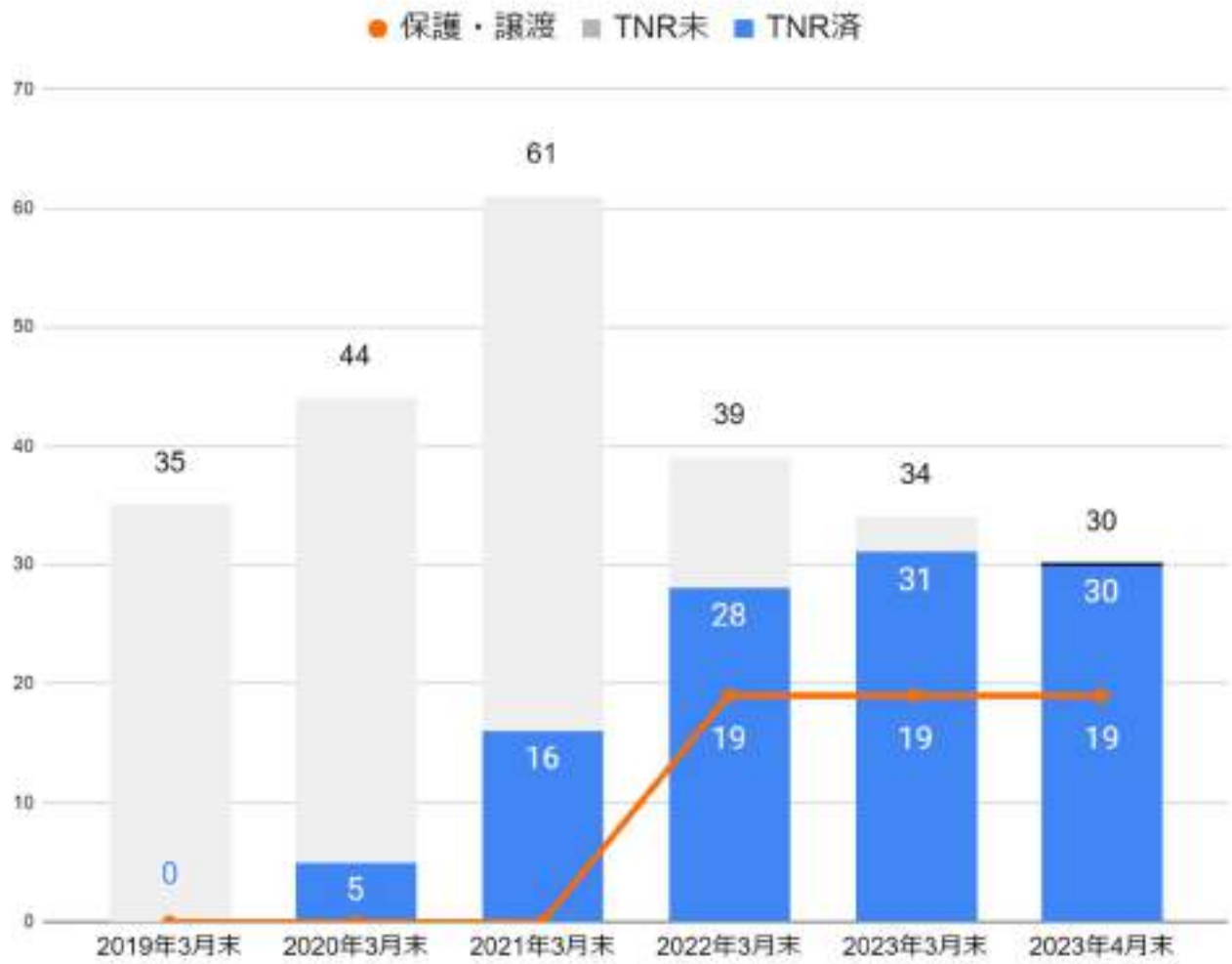
不妊手術後，耳カットがされた猫



ある TNR 活動日での 1 枚

2024 年度 TNR 結果

捕獲日	手術日	TNR 累計	ねこ台帳 No.	名前	性別
2023/11/10	去勢済みだったため耳カットのみ		028	たいやき	♂
2023/11/11	2023/11/12	40	221	おだんご	♂
2023/11/11	2023/11/12	41	222	くろまめ	♂
2024/03/21	2024/03/22	42	106	つばさ	♂



野良猫数の推移



最後に譲渡が決まった元キャンパス内の野良猫たち

4) 獣医学会での発表

獣医学会において、キャンパス内における野良猫数の管理において奏功した事例として、山犬にゃんこ大作戦のこれまでの活動の成果を発表する機会をいただいた。構成員の共同獣医学部4年生が中心となり、要旨の準備や発表のスライド、原稿の準備を行った。8月下旬に山口市内で行われた山口県大会の後、選考のうえ、10月はじめに鳥取県米子市で行われた中国地区大会に進むことができた。さらに、そこで学会長賞に選ばれ、なんと12月に神戸で行われた全国大会まで進むことができた。みんな、学会発表は初めての経験だったため、準備のときから緊張が止まらなかったが、顧問の渡邊先生に多くのサポートをいただき、何とかやり遂げることができた。中国地区大会での優秀賞、全国大会での発表をうけ、学会誌への論文投稿のほか、共同獣医学部HPでご紹介いただいたり、山口大学共同獣医学部同窓会「青山会」の会報にも投稿させていただいたり、より多くの方の目に触れる機会となった。

会場にいらっしゃった獣医師会関係者の方からは、実は野良猫の頭数をここまでしっかり抑えられるケースは珍しい、団体としての基盤がしっかりしているからこそだ、といった励ましのお言葉や、ゴールの明確化などについてのアドバイスをいただいた。発表内での質疑応答では、山口大学動物医療センターとの連携についての質問や、やはり外部猫の侵入についての懸念と対策についての質問などがあつた。

獣医師として、実際にこういった地域猫活動やその問題について携わっておられる先生方に、我々のこれまでの活動と現状についてご紹介をさせていただき、それに対して質問や意見をいただけるという機会に、緊張も大きかったが、こういった貴重な経験をいただけることに感謝の気持ちが大きく、とても勉強になった。また、全国規模にまで山犬にゃんこ大作戦のこれまでの活動や努力、また我々の活動から得られたノウハウなどを共有できる機会となり、先輩方がこれまで積み上げられてきた成果が報われるようで、胸がいっぱいであった。



獣医学会山口県大会



獣医学会中国地区大会

2023/10/31

「山大にゃんこ大作戦」の取組が令和5年度獣医学術中国地区学会長賞を受賞

このたび、令和5年度獣医学術中国地区学会（R5.9.30-10.1 於：米子市）において、「山大にゃんこ大作戦（共同獣医学部学生中心のサークル）」の取組として『大学キャンパス内の野良猫数管理において奏功した事例』が発表され、今年度の獣医学術中国地区学会長賞を受賞しました。

この賞は、中国地区各県獣医師会から推薦された、産業動物、小動物、獣医公衆衛生の各分野の何れも質の高い研究内容について発表が行われ審査されるもので、獣医公衆衛生分野からは28篇の発表があり、本取組を含む2篇が受賞したものです。

なお、本取組については、12月に神戸市で開催される第41回日本獣医師会獣医学術学会年次大会において、日本獣医公衆衛生学会（中国地区）の取組として発表される予定です。

共同獣医学部 HP での掲載

5) ホームカミングデー（活動発表、講演会、ミニ猫ツアー）

10月下旬、ホームカミングデー@共同獣医学部において、山大にゃんこ大作戦として企画の1枠をいただいた。企画内容としては、前期の活動報告も兼ねた団体の活動についての紹介のほか、山口市環境衛生課にご相談をし、地域猫活動についてのご講演をしていただくことになった。また、実際に学内にいる猫を見学し問題を身近に感じていただくためのミニ猫ツアーも企画した。

環境衛生課の担当者の方々は、どのような内容が良いか、どんな雰囲気が良いか、などイベント準備にあたり親身に相談に乗ってくださり、当日は猫の着ぐるみを着てイベントを盛り上げてくださった。山口市では今年度あらたに猫の飼育や地域猫に関する3つのリーフレットを作成しており、それをもとにご講演をしてくださった。私を含め、準備で参加した構成員もみな、大変勉強になる内容であった。また、ご講演にあたり打ち合わせを行っていくなかで、学内の野良猫の状況や現在の活動の様子などを共有させていただき、アドバイスをいただいたり、行政との連携についてのご相談をさせていただいたりできたのはとても良い機会であった。

ミニ猫ツアーでは、比較的人なれしている猫がいるエリアを見て回った。主に子供たちから猫に触りたいというリクエストもあり、危ない病気がうつるかもしれないこと、触るときは手袋などをつけることが望ましいこと、といった野良猫に接触するうえでの注意点を説明したうえで、猫との触れ合いも行ってもらった。

当日は、教職員から近隣住民の方、またお子さんまで、計20名ほどの方が来場して下さり、学内の野良猫問題について、少しでも多くの方に、身近に感じていただける機会となったのではないかと思います。ご参加いただいた方々と、環境衛生課の方々に心より感謝申し上げます。



山口市環境衛生課の方々によるご講演



ミニ猫ツアーの様子



ミニ猫ツアーの様子



ミニ猫ツアーの様子



ホームカミングデー参加メンバー

6) Giving Campaign2023 秋、参戦

10月下旬から11月上旬にかけ、より多くの方に、野良猫についての問題や山大にゃんこ大作戦について知っていただくために、Giving Campaign にはじめて参加した。ホームカミングデーが直前に重なっていたこともあり、準備や運営が十分にできなかったのが正直なところだが、山口大学の学生や教職員、また保護者の方やサークル員のご友人、さらに他大学で同じように猫の活動をされている方など、本当にたくさんの方々から温かい応援の言葉をいただき驚いた。計34件の投票と3件のご寄付をいただき、大変うれしく思うとともに、その後の活動の励みとなった。また、サークル員一同、投票・ご寄付をいただいた皆様、また多くのサポートをいただいた Giving Campaign 運営局の皆様にご心より御礼申し上げます。



Giving Campaign のサイトに載せた団体写真



Giving Campaign 告知の様子



応援メッセージの様子

7) 動物愛護センターでの実習

9月下旬に、動物愛護や地域猫活動に関して、また行政の役割と関わりについて学ぶために、構成員数名が動物愛護センターを訪問し、実習をさせていただいた。行政ときくと殺処分のイメージを持たれている方もいるかもしれないが、どの自治体も殺処分0に向けた取り組みがなされており、殺処分数は大幅に減少している。あくまでも譲渡が主体であり、引き取り数を減少させるために、マイクロチップの導入や、飼い猫・野良猫の不妊手術の推進、飼い主や一般市民のリテラシー向上の取り組みがなされている、といったことを学んだ。実際に動物愛護センターに引き取られた猫や譲渡先を探している猫との触れ合いや、職員の方の業務も体験させていただき、大変楽しく勉強できる機会となった。

3 おもしろプロジェクトだからこそ得られたこと

今回のおもしろプロジェクトにおける大きな収穫として、大学関係者の方々との間に、野良猫に関する問題意識の共有が生まれ、現状の問題点や管理体制について一緒に考え話し合う機会を得られた、というのを挙げたい。実働として掃除・給餌管理を最後まで続けられたことは、目に見える大きな成果ではある。しかしながら、今後エリア拡大を進めていき、大学全体に管理体制を浸透させていくうえで、土地や内部での活動の管轄・責任をもつ大学関係者と、情報を共有し話し合っていくプロセスを重ねていくことは、非常に重要な点であると考ええる。

おもしろプロジェクトを行っていく中で、猫やエサやりに関する情報、外部猫の侵入についてなど、自主活動ルームを通じて共有することが多々あった。それにより、野良猫問題の複雑さや難しさについて、大学関係者の方々に触れていただく機会が増え、実際に、学生支援課や総務課からの関係者の方々を中心とし、何度か猫の管理体制について話し合う機会をいただいた。話し合いを行う中で、エサやりに関する詳しい情報や、団体とエサやりさんとのこれまでの交流について共有し、エサやりを行っている人たちがそれぞれにどのような価値観をもっているのか、どのように価値観をすり合わせていくか、一緒にゴールに向かって協力していくためにどのような姿勢で臨むべきか、といった、最も重要となる合意形成の部分について議論を行うことができた。このように、少しずつ野良猫の問題について知ってもらい、一緒に考えてくれる人が増えていくこと自体に、まず嬉しさを感じるとともに、ありがたい想いでいっぱいであった。大学側と知識や状況を共有し、ともに考えていく機会を得たこと、またその過程で得られた新たな知見や案は、今後の活動を行っていく中で必ず大きな効果を発揮する。今後も、大学側との情報共有や議論を重ねるよう努めるとともに、今年度実行に移せなかった部分も精一杯進めていきたい。お忙しい中、話し合いの時間を設けてくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げる。

4 課題

1) 外部猫の侵入とその対策

今年度、4 件の外部猫と思われる猫の侵入が確認された。現在の団体メンバーが知る限り、ここ数年でこれほどの頻度で外部猫の侵入が確認されるのは、今回が初めてである。

(1) 各ケースの詳細

1 件目は生後 2 か月ほどの痩せた子猫であり、6 月中旬に農学部・獣医学部棟付近で確認された。侵入経緯は不明であるが、情報を得た時にはすでに餌付けがされてしまっており、キャンパス内（理学部 3 号館付近）に定着しつつあった。団体内で早急に対応を検討した結果、構成員の個々のつながりを利用して、里親を探すこととした。理由としては、小さすぎて手術対象ではないこと、もしメスであればさらなる繁殖の危険性があり様子見できるほど余裕がなかったこと、子猫で引き取り手が見つかりやすいだろうこと、しかし安易に子猫の情報を SNS 等で流すのは団体の活動内容について誤解を生み、場合によっては捨て猫などを助長させる恐れもあること、といったことが挙げられる。後日、すぐに構成員の知人の方が手を挙げてくださったものの、行き違いで学内のどなたかが学外ボランティア団体に猫を預け、その団体主体で譲渡を進めることとなった。この子猫の侵入を受け、以後の侵入を少しでも防止するため、2—2) で述べた猫除け用の超音波装置の設置を早急に行った。

2, 3 件目は、ともに痩せた若い猫であった。8 月上旬～中旬にかけ、経済学部棟の駐車場付近（国際交流会館がある通り）で確認された。2 頭の発見には時間差があるが、2 頭とも人懐っこく仲も良かったことから、もともと学外で一緒に暮らしていた可能性が考えられる（あくまで憶測）。留学生や事務職員等を含む複数のエサやりによりすでに学内に定着しつつあった。人懐こかったため、2 頭ともオスであることが容易に確認できた。団体内で対応を協議し、団体の TNR 活動期間である 10 月～11 月ごろまで様子を見つつ、TNR 対象とすることにした。もともと学内に居ついていた猫に対し、安易に TNR を行うことについて悩ましい部分もあった。なぜなら、家猫の可能性も否定できないこと、費用や人手などの関係から際限なくできるわけではないためすべてを受け入れていたらきりがなく、といった理由があるからである。しかしながら、今年度すでに 3 件の外部侵入があり、今後メスが侵入する可能性も十分に考えられたため、11 月ごろまで居ついているようなら TNR を行うこととした。実際に 2 頭とも 11 月に TNR を完了したが、リリース後まもなく 2 頭とも姿が見られなくなり、エサやりさんからの目撃情報も得られなくなった。TNR により警戒心が高まり生息場所を移動した可能性、あるいは誰かが保護した可能性も考えられる。この 2 頭については、TNR は行ったものの、4 か月ほど目撃情報が一切得られていないことから、学内猫の総数には含めていない。追記事項として、先述したように、この 2 頭の侵入により、このエリアでのエサやりが活発になったことから、もともと学内にいた猫たちの分布に変化が見られた。もともとキャンパス内の別の場所に主に姿を見せていた学内猫が移動して来たり、逆に新規 2 頭が居ついてしまったこ

とにより、このエリア付近にいた学内猫が見られなくなったりした。無秩序なエサやりにより学内猫の動向が把握しづらくなることが改めて分かる。また、この件で明らかとなったこととして、留学生によるエサやり問題がある。国により野良猫への考え方も異なると推察されることから、留学生に対してもきちんと伝わるような周知の工夫が必要である。また、ささみやウェットフードの直置きなど、衛生環境への損害がより大きいエサやりも、この2頭の侵入後、観察されることが多々あった。

4件目は痩せた黒猫で、12月下旬に農学部・獣医学部棟の玄関付近で目撃された（TNR完了の印である耳カットがなかったことから新規猫であると同定）。先に述べた理由（見知らぬ猫を安易にTNR対象とすることへの危惧と、雌の侵入の可能性を考慮した緊急性）により、今回は山口市環境衛生課へ猫の引き取りの相談を行うこととした。山口市環境衛生課では、止むを得ない事情により飼育が困難になった猫や、緊急的な医療ケアが必要な野良猫（TNRが完了した猫、地域猫ではない）等の引き取りを行っている。猫の引き取りには2,000円ほどかかり、捕獲と引き渡しは依頼側が行わなければならない。環境衛生課との協議は現在のところあまり進められていないが、TNRほど費用はかからないにしても、安易なエサやりにより居ついた猫への責任対応を安易に背負うべきなのか、といった点も協議すべきであると考ええる。目撃情報はこの1回であり、その後確認されていないことから、学内に居ついている可能性は低いと考えられることから、学内猫の総数には含めていない。

(2) 考察

以上、4件の外部猫侵入が確認されたものの、いずれも新たに学内猫の総数には含めていない。今年度だけでこれほど多くの外部猫の侵入が起きることは予想外であった。今後も、特に2～4件目の猫については調査、情報収集を行っていく。また、超音波装置などの利用と捨て猫防止による侵入対策の強化はもちろんのこと、侵入した際の対応について積極的な協議が必要である。以下、その協議を行ううえで加味すべき内容を述べる。

(ア) 外部から猫が侵入してしまう要因

大学キャンパスという特殊な環境であることは大きな要因であると考ええる。具体的には、広大な敷地に多数の出入口があり侵入も容易なこと、自然や建物が多く隠れ場所、棲息場所が多いこと、外部に比べ車通りが少なく比較的安全であることなどである。また、エサの匂いにつられて入ってくることも要因の一つと考えられ、あるいは捨て猫も考えられる。

(イ) 外部から侵入した猫が学内に居ついてしまう要因

考えられる要因としては、安易な餌付け、あるいはキャンパス内のゴミなどを狙ったり山で野生動物を狩ったりなどして棲息する、といったことが考えられるが、安易な餌付けが要因の大部分を占めるだろう。キャンパス内ではエサやりがされやすいこと、加えて、新たに侵入してきた猫に対しても見境なく安易に餌付けを行ってしまうこと、といった理由により外部猫が学内に居ついてしまう。

キャンパス内でエサやりが行われやすいことの理由として、大学キャンパスの公共性の高さがあげられる。住宅が立ち並ぶ一般的な地域においては、自身あるいは他者の敷地内や生活に直接的な影響を与えるため、エサやりを行うことに多少の抑制力が働く。また、エサやりや猫に対する苦情も顕在化しやすいのではないかと思う。一方で、大学キャンパス内では、自宅や生活に直接的に損害が出るわけではないことがほとんどであり、そのような意識からエサやりを行うことに対する責任感や抵抗感の減退が生じると考えられる。また、同様の理由により、良くも悪くも猫やその問題に関心な人が大多数であることから、猫の問題が顕在化しにくい。実際に、これまで猫に関する苦情やトラブルが報告されてはいるものの、ごく一部の人が認識しているのみであり大学全体の問題として広く意識されてはこなかった。

(ウ) 侵入後の対策

まずは、新たに侵入してきた猫に対し、決して餌付けを行わないことが第一である。そして、餌付けをしていないにも関わらず、何らかの理由により学内に居ついてしまった場合の対応については、TNR、行政への引き渡し、譲渡などの手段が考えられるが、費用や緊急性を含めどのような基準で選択するか、といったガイドラインの協議が必要である。

今後、山にゃんこ大作戦が給餌を一括管理し、その他のエサやりを止めてもらうことを目指していくが、現状はいまだ不特定多数によるエサやりが行われている状況である。また、外部侵入猫は痩せている個体が多く、どうしても可哀そうでエサをあげてしまう人も多い。日頃より定期的に猫にエサをあげている人に加え、たまたま見かけて気まぐれにあげてしまうケースも今回見られた。エサやりさんをはじめとして野良猫問題について一緒に考えていく中で、新規猫への関わり方についても話し合い、侵入後の対策についての共通認識を形成することが重要である。また、エサやりさんだけでなく、学内に広く野良猫問題について周知していく過程を通して、学内に限らず野良猫を安易に餌付けしないという人々のリテラシー向上を図ることが望ましい。



外部猫侵入に伴い見られるようになった置きエサ



直置きされたささみ



外部猫への新たなエサやりにつられて移動してきた他エリアの猫

2) 団体の管理エリアにおけるエサやりの制御不足

団体の管理エリアにおいて、団体以外のエサやりを十分に制御できなかったことは大きな反省点である。経緯や今後の対策とともに、この件を踏まえて改めて認識された、猫の管理に対して共通の認識をもち合意形成を得ることの重要性と難しさについて触れたい。

(1) 経緯・今後の対策

このエリアでの活動を始めるにあたり、普段エサやりがされていることが把握していたが、エサやりの時間帯などにムラがあり、コンタクトをとることが困難であった。そのため、管理体制に関する合意形成の段階においては、エサやりをしている人を含めた話し合いの場を設けることはなく、置きエサがされていた場所付近に、団体の管理エリアであるためエサやりを禁止する旨の掲示を行うかたちで様子を見ることとした。ただし、大々的な周知を行うことは避けた。理由としては、管理エリアがまだ1つであり管理体制が完全に確立していなかったことから、大々的に周知を行うことは疑問や誤解を生むリスクが大きいと考えたためである。しかしながら、一般的なポスター掲示だけでは、エサやりを制御することはできておらず、その後エサやりと接触することもできなかった。

また、活動時に近隣住民からエサやりを助長するからやめてほしいと注意を受ける事態が発生した。以前、エサやりによりカラスがたかり自宅に被害があったことから、大学に苦情を入れたという経緯があったそうだ。我々が行っている活動の趣旨について説明をしたが、「むしろエサやりをやってもいいんだという誤解を招くからやめてほしい」という意見をいただいた。これに対しては、給餌場所の変更を行うなどして、説明と対応を行った。

誤解や摩擦を生みやすい野良猫管理の分野において、周知の方法やタイミングには慎重を要するものの、団体による管理体制が整ってきたこのエリアについては、今後、エサやりさんとそれ以外の人の双方に向け、野良猫管理の趣旨とエサやり禁止の周知をより大きく行っていく必要がある。また、今年度計画はしていたものの実践的な利用に着手できていなかった、質問・意見に対する対応マニュアルの作成等についても、今後の課題とした。



管理エリアで見られた置きエサ



管理エリアで見られた置きエサ

(2) 猫の管理に対する共通の認識と合意形成について

我々が提案している学内猫の管理体制は、最終的には野良猫をゼロにするという根本的な解決を前提としたうえで、エサやりをしている人の考え・猫に困っている人の考え、両者の落としどころ（合意点）を見つけ、適切な猫の管理のもとより良い学内環境を形成するというものである。あくまで両者の落としどころを見つける理由は、すでに学内に多くの猫が生息し人のエサやりにより維持されている現在の状況を踏まえ、ただ単に一方的にエサやりを禁止したとしても、エサやりさんとしては気持ちの納得がいかず水面下でエサやりが続くであろうこと、またゴミ荒らしや畑荒らし、生息場所の変化、近隣住宅への被害など新たなトラブルが発生することが予想されるためである。そして、その落としどころというのは、TNRで繁殖を抑えることを大前提としたうえで、衛生面に配慮した適切なルールのもと給餌の管理や排泄物の掃除を行い、なるべく人々に迷惑をかけないような猫

の管理体制を行う、というのが基本となるわけであるが、関係者みんなで話し合い一緒に見つけていくこと、すなわち共通の認識をもととした合意形成が最も重要なステップとなる。またその際には、気持ちの納得をつける、というのも大切なポイントとなる。

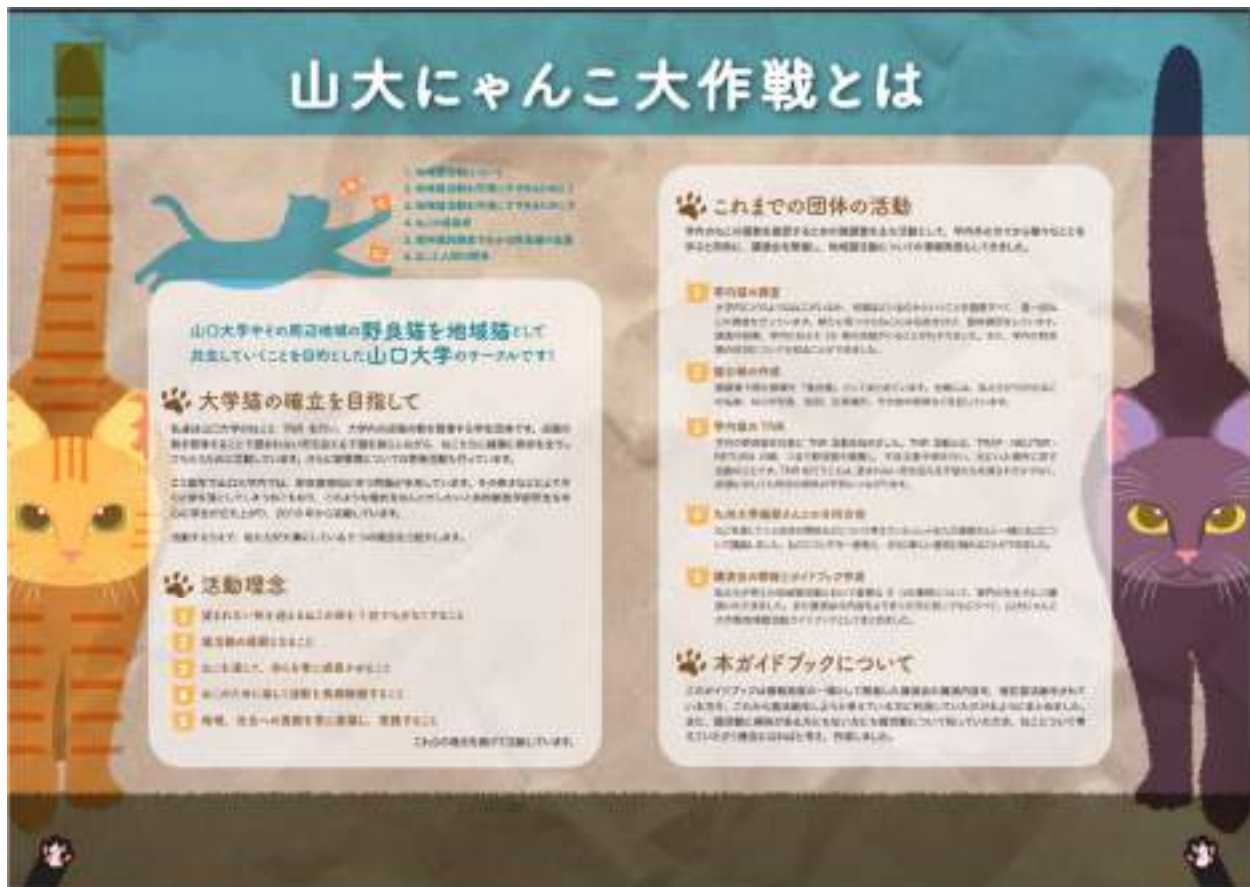
現在目指している学内猫の管理は、あくまで環境衛生を根幹としたものであり、動物愛護だけに焦点をあてたものではない。しかしながら、エサやりが活動内容に含まれることから、愛護的側面のみをくみ取り解釈してしまう人も多く、地域で猫を飼うというような誤った認識を与えてしまうことが多い。これにより、エサやりさん側は猫に対して際限のないお世話をすることと捉えてしまったり、逆に猫に困っている人を含めエサやりさんでない人々は、地域猫活動に対して不信感を抱きやすかったりする。また今回、近隣住民から得た意見のように「エサやりをやってもいいんだという誤解」を招く可能性も十分にある。

新たなエリアで管理を始める際は、そのエリアのエサやりさんを含めた対話の場を設け、猫の管理における目的や線引きなどについて共通の認識をもち合意形成に努めること、そのうえで、その他大勢の人々への周知をしっかりと行うことの重要性を改めて認識した。3で述べたように、今年度大学関係者と話し合いを重ねるなかで、合意形成の場を設けることの重要性や、またどのような姿勢で臨むべきか、といったことを共有することができた。今年度の反省を踏まえ、引き続き検討を重ねつつ、今後の管理エリア拡大を目指したい。

我々の猫の管理については、地域猫活動を参考にしている。山口市では新たにリーフレットが作成された。また山大にゃんこ大作戦が2018年度～2019年度にかけ作成した地域猫ガイドブックを添付しているため、目を通していただけると幸いである。



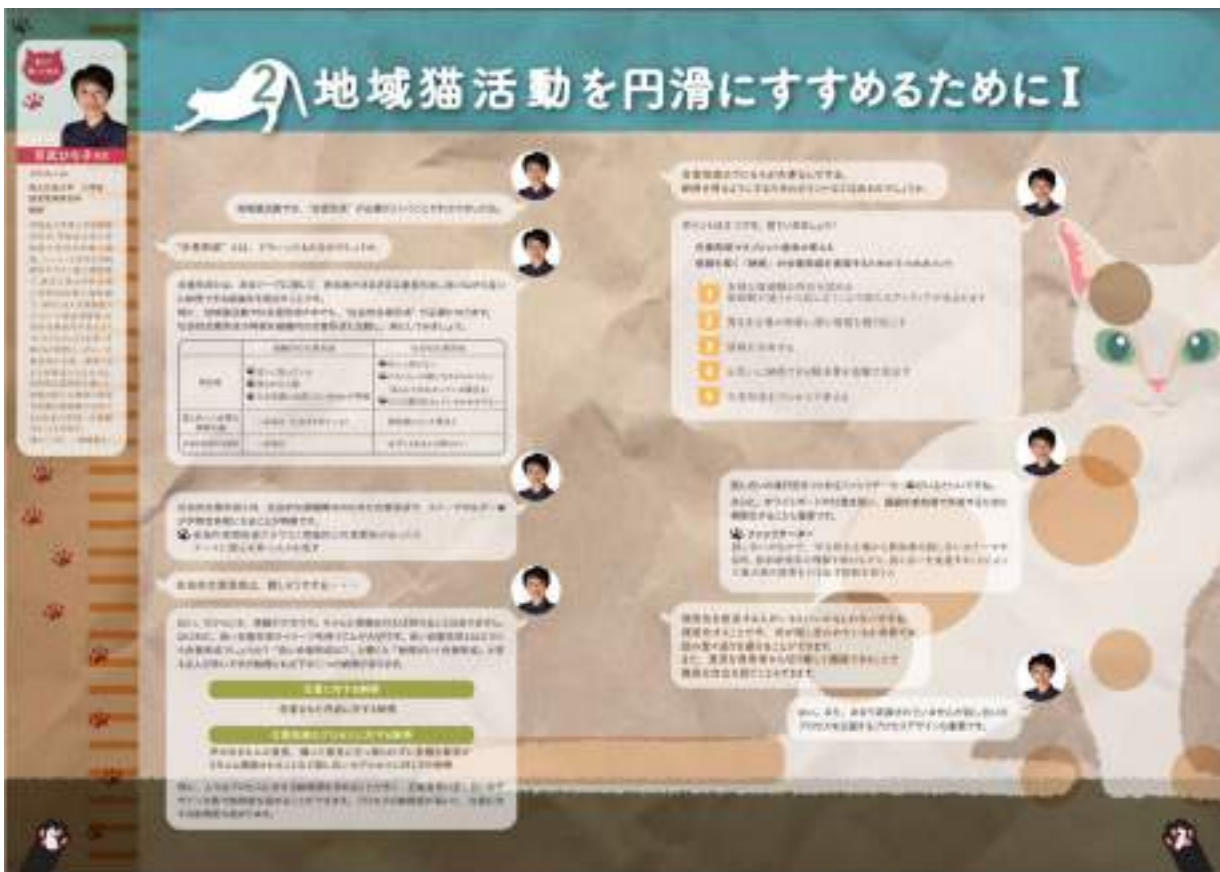
山大にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブック



山大にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブック



山大にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブック



山大にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブック



山犬にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブック



山にゃんこ大作戦地域猫活動ガイドブック

3) 人手不足

活動自体は地味で地道なものが多いため、後期以降はだんだんと活動参加への意欲を失っていくメンバーも多い。また、特に長期休みは、帰省などで市内を離れるメンバーも多く、負担が偏ってしまうことがあった。新年度の勧誘活動と合わせて、参加意欲を継続させるための工夫や、継続的に人員を確保する取り組みが必要である。

5 今後の展望

まずは、今年度開始した管理エリアでの活動を今後も継続できるよう、団体メンバーの持続的確保に努めていくとともに、周知の強化を行い、また実践的な利用ができなかった質問・意見等への対応マニュアルの作成も進めていく。周知においては、より多くの人にとって分かりやすい（易しい）ポスターや、留学生を対象とした英語版のポスターなどの工夫を行う。そして、合意形成と周知を十分に伴ったうえで、管理エリアの拡大を目指す。また、外部猫の侵入防止対策の強化と、侵入後の対策の協議を進める。

さらに、シンポジウムやイベントを企画し、多くの人々に野良猫問題や団体の活動について知ってもらう機会を設けるとともに、特に子どもたちに対し、野良猫との関わり方に関するリテラシー向上を図るような働きかけをしていく。

謝辞

新たな管理体制確立という難しいチャレンジに対し、根気強く我々の話を聞き一緒に考えてくださった高橋学生支援センター長、いつも親身に相談に乗ってくださり、多くの先生方と我々をつないでくださった自主活動ルームの石井コーディネーター、尾川学生支援課副課長、また顧問の渡邊准教授、TNR 活動に際し道具や部屋の貸し出しにご協力いただいた先生方、未熟な部分も多く、たくさんのご苦勞をおかけいたしました。お忙しい中、おもしろプロジェクトを通してご協力いただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。